

おおがい 大貝窯跡

多賀城跡調査研究所 矢内雅之

所 在 地	宮城県利府町赤沼字大貝
立地環境	松島丘陵から派生した標高70 mほどの丘陵斜面
発見遺構	須恵器窯、瓦窯、木炭窯、木炭焼成坑、竪穴建物、土坑
年 代	8世紀末～9世紀初頭（須恵器窯）、8世紀後半～9世紀中葉（瓦窯・木炭窯）

遺跡の概要

大貝窯跡は仙台平野の沖積地から5km

ほど北東に入った、標高70mほどの丘陵上に所在する（第1図）。周辺地形等から、近接する大貝A窯跡も本同じ範疇で捉えるべき遺跡とみられ（文献23）、本稿ではこれらを一括して扱う。付近の丘陵地帯は大小の沢が多方向から入り込んだ複雑な地形をなしており、沢に面した斜面上に多数の窯群が分布している。本窯跡の周辺には大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡・硯沢窯跡・中倉窯跡・丹波沢南窯跡などが所在し、春日窯跡群を形成している。これらは約7km南西に位置する多賀城へ製品を供給していたことが判明している。

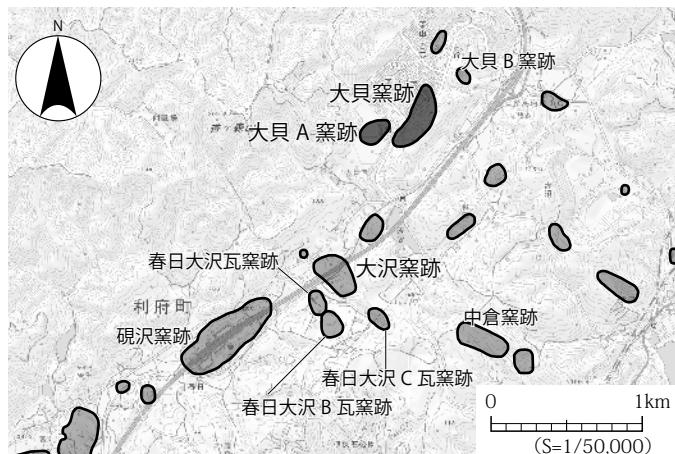
遺構は南北にのびる沢に面した東西の丘陵斜面上に分布しており、須恵器窯2基（1・16号窯）、瓦窯15基（2～4、13～15、17、20～27号窯）、炭窯9基（5～7、9～12、18、32）、竪穴建物9棟、木炭焼成坑・土坑等が確認されている（第2図）。須恵器窯・瓦窯は半地下式、炭窯は地下式である。瓦窯は3～5基を一単位として4箇所に構築され、うち2箇所では須恵器窯と並列している。このほか、中世の製鉄炉・木炭窯が検出されている（文献23）。

規模・構造（第2図・第1表）

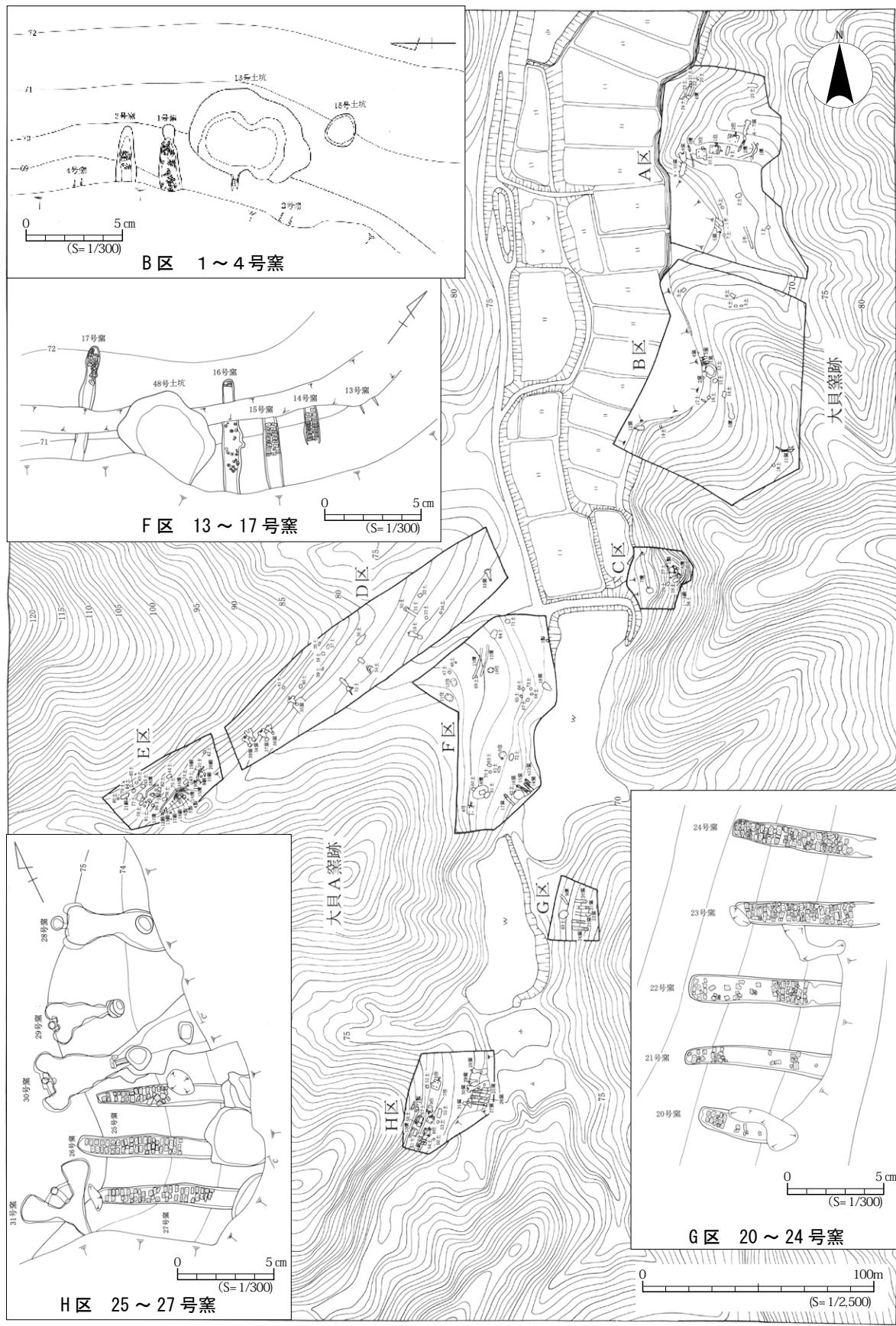
須恵器窯 1・16号窯の2基があり、いずれも半地下式窯窓で瓦窯と並列して構築されている。窯体長は残存状況の良い16号窯で5.94m、焼成部幅は0.72～0.94mである。ともに床面は1面で、焼成部の床面には須恵器壺などを伏せて焼台としている。窯体内・灰原の遺物出土状況から、どちらの窯も燃焼部付近に大甕・壺などの大・中型品を、窯尻に進むにつれて壺・蓋などの小型品を配して焼成していたことが想定されている（文献23）。

瓦窯 瓦窯は3～5基を一単位としてB・F・G・H区の4箇所に構築され、うちB・F区の2箇所では須恵器窯と並列している。構造のわかるものは全て半地下式窯窓である。窯の規模は窯体長が6m前後のものと7m前後のものに分けられ、幅は1m前後のものを主体とする。14・15・17・20～27号窯では床面に丸瓦・平瓦を並列し、階段状の焼台を形成している。G区の20～24号窯は窯体長が6m前後で、天井構架材が認められる。H区の25～27号窯はG区の瓦窯より大型で、天井構架材は確認されていない。前庭部の切り合い関係から、25・27号窯→26号窯の新旧関係が捉えられている（文献23）。

木炭窯（古代） 長方形の焼成部に焚口を付した寸胴型のもの（5～7、9～11、18・32号窯）と、不整方形で燃焼部側がすぼまるもの（12号窯）がある。12号窯では150本以上の木炭が窯詰めされた状態で見つかった。これらの木炭窯では瓦の二次利用がみられることから、木炭窯においても瓦工



第1図 大貝窯跡群の位置



第2図 大貝窯跡群遺構配置図（文献23をもとに作成）

人の関与があった可能性が指摘されている（文献 23）。9・10 号窯では軒丸瓦・丸瓦を転用した排煙口が、11・32 号窯では丸瓦を転用した暗渠が検出されている。6・7・9～11・18・32 号窯では堆積土から瓦が出土しており、排出孔の閉塞に用いられたものとみられる。これらの瓦には多賀城第Ⅲ期の軒丸瓦が含まれ、木炭窯の年代もこれと同時期と捉えられる（文献 23）。

竪穴建物 9 棟確認され、出土遺物から 8 世紀後半、9 世紀前半、9 世紀中頃に位置づけられる。9 世紀中頃の竪穴建物では 1 号建物で砥石、2・4 号建物で鉄滓が出土しており、鍛冶工房の可能性がある（文献 23）。

出土遺物（第 3 図）

土師器は壺・鉢・甕・甌・手捏土器、須恵器は壺・蓋・鉢・甕・壺・円面硯・風字硯が出土している。窯出土須恵器として、1 号窯では須恵器壺・蓋が、16 号窯では須恵器壺・高台壺・蓋・鉢・甕・壺が出土している。壺の大部分は焼台に転用されたものとみられる。1 号窯の須恵器壺は平底の底部から体部が直線的に外傾し、口縁部がやや外反する E II 類が出土須恵器壺の 58% を占める。16 号窯では E II 類とともに体部が直線的に外傾し口縁部がそのままおさまる E I i 類が主体をなし、底部が丸底風の平底を呈する B I 類が加わる。底部切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を施すものが多いが、16 号窯出土須恵器壺は底部の再調整や全体のつくりが粗雑である。これらの特徴から、両須恵器窯は 8 世紀末～9 世紀初頭頃の年代観が想定され、1 号窯が 16 号窯にわずかに先行すると考えられている（文献 23）。

瓦は軒丸瓦・丸瓦・平瓦が出土している。出土瓦の大部分は丸瓦であり、特に平瓦が各々 1 点しか出土していない B・F 区では、丸瓦を中心に焼成していたと考えられている（文献 23）。

軒丸瓦は多賀城分類 431、311、313 と同范であり、多賀城第Ⅲ期（780～869 年）の所用瓦である。重弁蓮花文軒丸瓦（多賀城 431）は 1～4 号窯灰原、7 号窯、4 号竪穴建物、9・10 号窯、15 号窯、48 号土坑、F 区において 10 点出土している。同范瓦が大貝窯跡群の約 1 km 南方に所在する大沢窯跡で表採されているほか（文献 22）、台原・小田原窯跡群の安養寺下窯跡でも出土している（文献 6）。細弁蓮花文軒丸瓦（多賀城 311）は 1～4 号窯灰原、7 号窯、9・10 号窯、15 号窯、32 号窯、13 号土坑、15 号土坑、F 区において 10 点出土している。他の生産地では、台原・小田原窯跡群の神明社窯跡（文献 9）・与兵衛沼窯跡（文献 10）で同范瓦が出土している。大型細弁蓮花文軒丸瓦（多賀城 313）は 9・10 号窯、B 区において 3 点出土している。

丸瓦は有段・粘土紐巻きづくりの丸瓦である。凸面には縄叩き・ナデがみられ、多賀城分類の丸瓦 II B 類 a タイプに該当する。

平瓦は粘土板一枚作りで、凸面側縁部に凹型台圧痕があるものとないものがある。多賀城分類では前者が平瓦 II B 類 b タイプ、後者が平瓦 II B 類 a タイプに該当する。

系譜・供給先

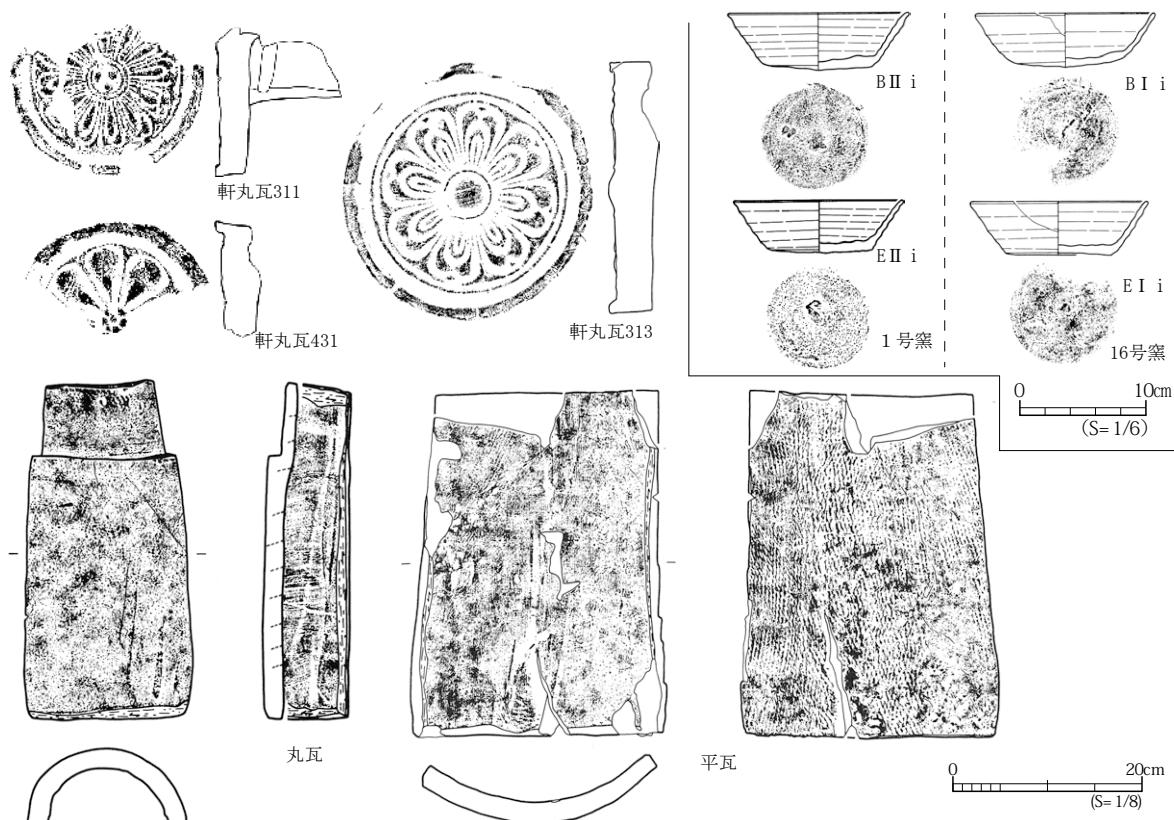
大貝窯跡群は多賀城第Ⅲ期（780～869 年）の瓦を生産したことが判明し、重弁蓮花文軒丸瓦 431、細弁蓮花文軒丸瓦 311 は仙台市台原・小田原窯跡群と同范関係を有する。このうち、431 は大貝窯跡群出土のものの方が安養寺下窯跡出土のものよりも范傷が進行しているため、安養寺下窯跡→大貝窯跡群へ瓦范が移動したことが想定される（文献 23）。大貝窯跡群では立地や出土遺物から、須恵器窯・木炭窯も瓦窯と密接な関係を有していたことがうかがえ、本窯跡群は 8 世紀後半以降、多賀城を中心とする都市域に瓦・須恵器・木炭を供給したとみられる。9 世紀以降にも硯沢・大沢窯跡等で窯業生産が存続し、春日窯跡群は国府多賀城を支える生産拠点として機能し続けた（文献 15・23）。なお、大貝窯跡では中世の製鉄炉や炭窯も多数検出されており、大沢窯跡では慶安 3 年（1650）頃に生産さ

れたとみられる、松島瑞巖寺所用瓦も発見されている（文献 15・23）。古代以降生産の場として位置づけられた春日窯跡群では、中世・近世にも大々的な生産活動が行われたようである。

※関連文献は「大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡」を参照

調査区	遺構名	構造	性格	年 代	窯体長	焼成部幅	燃焼部幅	煙道	床面傾斜	床面枚数	特 徴
B 区	1号窯	半地下式	須恵器窯	8C末～9C初頭	(3.46m)	0.94m		傾斜	28～30°	1	床面を砂により整地し、焼台（須恵器・丸瓦）を水平に設置
	2号窯	半地下式？	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(3.40m)	-		-	-	-	
	3号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(3.46m)	0.72 m		-	22～26°	1	瓦片により焼台構築
	4号窯	-	瓦窯？	多賀城第Ⅲ期？	(0.64m)	-		-	-	-	
F 区	13号窯	-	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	-	-		-	-	-	
	14号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(2.06m)	0.6 m		-	14～18°	1	丸瓦を並列した焼台を9段以上構築
	15号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(3.56m)	0.648 m		-	13～18°	1	丸瓦を並列した焼台を10段以上構築
	16号窯	半地下式	須恵器窯	8C末～9C初頭	(5.94m)	0.78 m	0.65 m	-	12～26°	1	瓦・須恵器により焼台形成
	17号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(6.16m)	0.49 m	-	傾斜	19～22°	1	丸瓦を並列した焼台を6段以上構築
G 区	20号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(2.81m)	0.63m	-	-	24°前後	1	丸瓦を並列した焼台を5段以上構築。天井構架材あり。
	21号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	(5.63m)	0.74m	0.67m	-	21～24°	1	丸瓦を並列した焼台を4段以上構築。天井構架材あり。
	22号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	6.3m	0.91m	0.73m	-	22～24°	1	瓦を並列した焼台を15段以上構築。天井構架材あり。
	23号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	6.3m	0.91m	0.73m	-	20～23°	1	瓦を並列した焼台を17段以上構築。天井構架材あり。
	24号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	5.75m	0.78m	0.72m	-	21～22°	1	瓦を並列した焼台を16段以上構築。天井構架材あり。
H 区	25号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	6.45m	0.78m	0.75m	-	20～24°	1	瓦を並列した焼台を7段以上構築
	26号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	0.87m	-					掘方底面に数点の丸瓦を焼台として設置
				多賀城第Ⅲ期	6.85m	1.12m	-	傾斜	17～21°	2	瓦を並列した焼台を25段以上構築（最終床面）
	27号窯	半地下式	瓦窯	多賀城第Ⅲ期	7.14m	0.96m	0.93 m	-	15～24°	2	瓦（丸瓦主体）を並列した焼台を26段以上構築（最終床面）

第1表 大貝窯跡群属性表（文献 23 より作成）



第3図 大貝窯跡群出土須恵器・瓦（文献 23 より作成）